

グローバル・スタディーズ研究センター 2014年度プロジェクト

2014-1

2014年6月3日（火）開催

第1回グローバル・スタディーズ研究センター院生合同セミナー

本センターは、平成26年度第1回グローバル・スタディーズ研究センター院生合同セミナーを下記の通り開催いたしました。

日時：6月3日（火）16:20～

場所：国際関係学部棟 3317 講義室

プログラム：

趣旨説明ほか

研究発表（発表20分、質疑応答20分）

発表者：高木円

タイトル：「ウクライナ危機の研究—内政と外交のリンケージ—」

コメンテーター：小窪千早（国際関係学部）

2014-2

2014年7月1日（火）開催

第2回グローバル・スタディーズ研究センター院生合同セミナー

本センターは、平成26年度第2回グローバル・スタディーズ研究センター院生合同セミナーを下記の通り開催いたしました。

日時：平成26年7月1日（火）16:20～

場所：国際関係学部棟 3317 講義室

プログラム：

研究発表1（発表20分、質疑応答20分）

発表者：王彬（おうひん）（国際関係学研究科 M2）

タイトル：中国西北地区のハラール産業に関する文化人類学的研究

コメンテーター：奈倉京子

研究発表2（発表20分、質疑応答20分）

発表者：青木聡美（国際関係学研究科 M2）

タイトル：コールセンター業務におけるストレスとそのマネジメントに関する研究

コメンテーター：渡邊聡

2014-3

2014年12月2日(火)開催

グローバル・スタディーズ研究センター特別企画：中部地区の大学院生による交流セミナー

本センターは、中部地区の大学院生・若手研究員を招聘して、本学の院生と合同で研究発表・討論をおこなうとともに、情報共有と相互交流をはかることを目的として、特別企画「中部地区の大学院生による交流セミナー」を開催いたしました。

日時：2014年12月2日(火) 15:40～17:40

場所：国際関係学部棟 3317 教室

プログラム

研究発表1 15:40～16:00

青木聡美（静岡県立大学大学院国際関係学研究科修士課程）

「コールセンター業務におけるストレスとそのマネジメントに関する感情労働観点からの研究」

研究発表2 16:00～16:20

加藤英明（南山大学大学院人間文化研究科博士後期課程）

「小規模工場の現場からみる機械工の技能と分業関係——愛知県における自動車製造との関わりを事例に」

研究発表3 16:20～16:40

王彬（静岡県立大学大学院国際関係学研究科修士課程）

「中国西北地区のハラール産業に関する文化人類学的研究」

研究発表4 16:40～17:00

坂下凌哉（南山大学大学院人間文化研究科博士前期課程）

「アンドゥオンルッサイ村の土器づくり-カンボジア伝統陶器復興プロジェクトをみるモノづくりの人類学-」

研究発表5 17:00～17:20

陳曦（静岡県立大学大学院国際関係学研究科修士課程）

「中国の若者によるオタク文化の受容」

研究発表6 17:20～17:40

長谷川卓馬（北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科博士前期課程）

「創作活動を形成するアクター——アクターネットワーク理論からみるライトノベル投稿者の実践」

2014-4

2015年1月22日(木)開催

公開講演会 現代中国における『民族服装』問題

本センターは、2015年1月22日(木)14時40分から、愛知大学国際中国学研究センターとの共催で、公開講演会「現代中国における「民族服装」問題」を開催いたしました。

中国人にとって服は、自己表現を意味するだけでなく、文化の表象として意味や革命の表象としての意味がありました。20世紀、服は個人が自由に選択できるものではなく、「中山服」や「軍便服」など、国で統一されたものを着ていたことが紹介され、それを揃って着用している民衆の姿が印象的でした。服は、イデオロギーの象徴であり、等級制を反映しているものであったことがわかりました。

改革・開放以降、人々の衣生活に変化が起きます。服は自己主張・表現のツールとなったのです。2001年、上海APEC開催時に、どんな民族衣装で「中国式」を表現するかが課題となり、「新唐服」が開発されました。2004年になると、「漢服」ブームがネットを通して広がっていきました。「漢服」は、漢民族の血統継承と漢文化の正統性を強調しており、漢民族ナショナリズムの性格をもっています。同時に若者が「中国伝統の服」を古代(華夏)に求める運動として注目されています。

講師の周教授による上記の報告・解説に対して、コメンテータの富沢研究員からは、日本やインドネシアの民族衣装に関する観念や運動が紹介され、それらと中国のそれとの比較検討が提案されました。「漢服」運動の共通項として、高次元の抽象性を備えたシンボルとして想像／創造されたものであること等の意見が出されました。

21世紀初頭に中国の都市部では、少数の若者を中心に「漢服復興運動」が勃興し、現在も活発に活動しています。少数民族の多彩な民族衣装を意識し、漢民族の民族衣装を構築しようとするこの社会的・文化的運動をどう理解すべきでしょうか？ 現代中国における「民族服装」問題の由来、その歴史的経緯および中国人の「民族服」/「国民服」作りの試行錯誤を整理します。それにより、今もなお依然として中国社会を悩ませつづけるこの問題の内的ジレンマを明らかにし、中国人の「民族服装」をめぐる様々な文化的実践やその問題点を分かりやすく解説します。

主催：愛知大学国際中国学研究センター現代中国地域研究 (NIHU)連携研究拠点 ICCS 文化的アプローチ班

共催：静岡県立大学グローバル・スタディーズ研究センター

日時：2015年1月22日(木) 14:40～16:10

場所：静岡県立大学一般教育棟 1階 2107 教室

講師：周星教授（愛知大学国際コミュニケーション学部・同国際中国学研究センター）

コメンテーター：富沢寿勇（グローバル・スタディーズ研究センター研究員）

連絡先：奈倉京子（静岡県立大学国際関係学部講師）

電子メール：nagura@u-shizuoka-ken.ac.jp

電話番号：054-264-5346

愛知大学国際中国学研究センターICCS文化的アプローチ班
静岡県立大学グローバル・スタディーズ研究センター
共同開催

＜公開講演会＞

現代中国における 『民族服装』問題

講師 周星 教授

愛知大学国際コミュニケーション学部・同国際中国学研究センター

コメンテーター 富沢 寿勇 教授

静岡県立大学国際関係学部

2015年1月22日(木) 14:40～16:10
静岡県立大学国際関係学部棟2107教室

※聴講無料、申込不要、一般公開

【お問い合わせ先】

企画・担当者：奈倉京子（静岡県立大学国際関係学部 講師）

連絡先：nagura@u-shizuoka-ken.ac.jp

電話：054-264-5346

2014-5

2015年1月31日（土）開催

県民公開シンポジウム グローバル化時代の「共生」を問い直す

本センターは、読売新聞静岡支局との共催で、県民公開シンポジウム「グローバル化時代の「共生」を問い直す－他者との共存は可能か－」を開催いたしました。本学学生や県民のみなさま約50名にもご参加いただき、「共生」という視点から見た静岡県とアフリカ社会の共通点、地域社会が抱えるグローバル化時代の課題など、本センターの研究活動についての議論を深めることができました。

なお、シンポジウムの概要は読売新聞2月6日（火）朝刊に掲載されております。



(撮影: 望月良憲)



(撮影: 望月良憲)

グローバル化が進んだ結果、今日の世界では、地球がひとつの村であるかのような状況が生まれています。しかし、この地球村では異質な他者が衝突を乗り越え共存することになります。このシンポジウムでは、「共生」をキーワードに、障がいと共生社会、静岡県の在住外国人と多文化共生、アフリカの紛争と民族共生、アフリカの自然との共生など、共生をめぐる4つの課題を採り上げ、同化でも分離でもない他者との共存の在り方を考えることを目的とします。

日時 2015年1月31日(土曜日) 15時00分～17時30分

会場 静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ 映像ホール

事前申込不要(先着99人)

入場無料

パネリスト

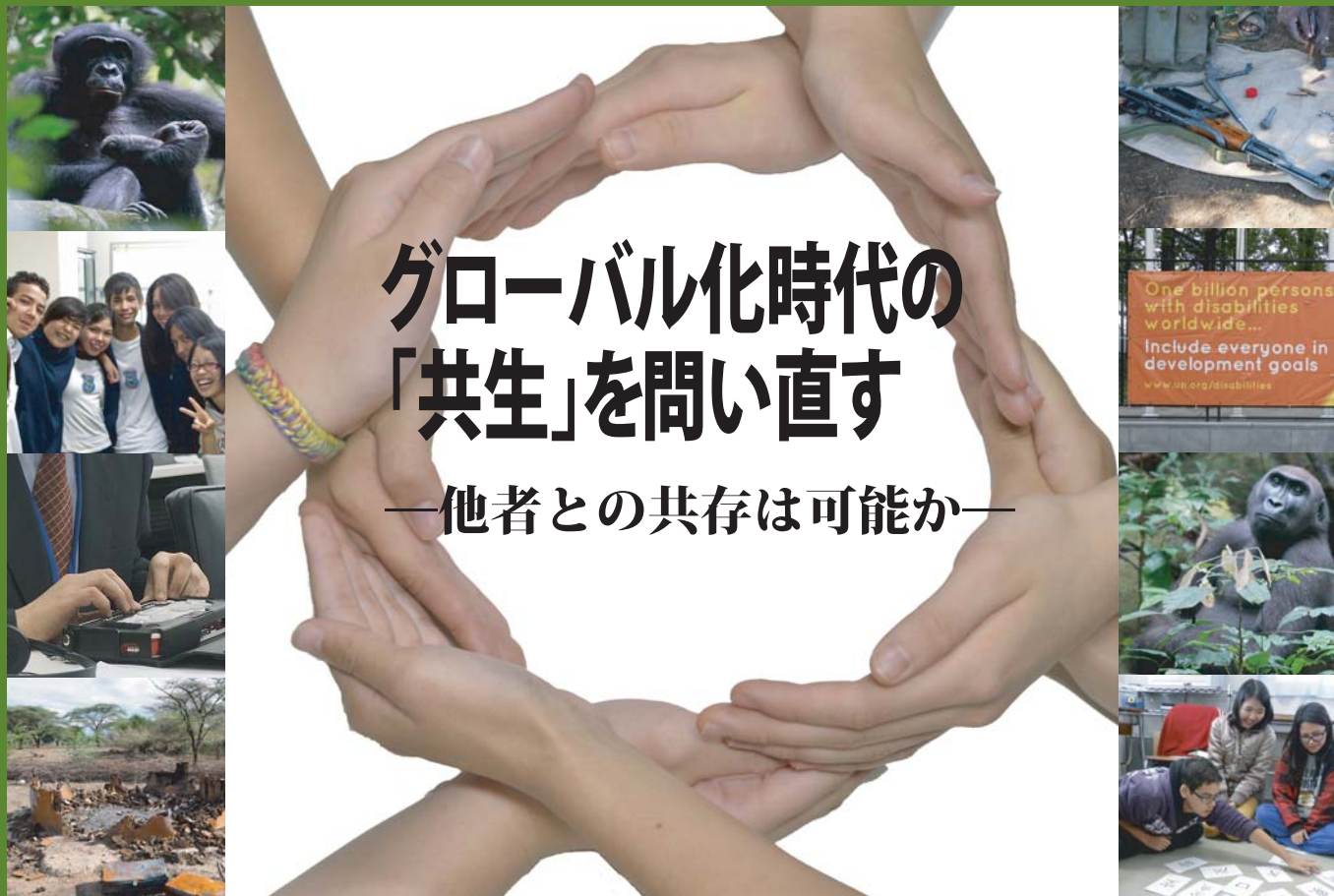
石川 准(国際関係学研究科附属グローバル・スタディーズ研究センター長/教授)

湖中 真哉(同副センター長/教授)

高畑 幸(同研究員/准教授)

松浦 直毅(同研究員/助教)

県民公開シンポジウム



グローバル化が進んだ結果、今日の世界では、地球がひとつの村であるかのような状況が生まれています。しかし、この地球村では異質な他者が衝突を乗り越え共存することになります。このシンポジウムでは、「共生」をキーワードに、障がいと共生社会、静岡県の在住外国人と多文化共生、アフリカの紛争と民族共生、アフリカの自然との共生など、共生をめぐる4つの課題を採り上げ、同化でも分離でもない他者との共存の在り方を考えることを目的とします。

日時: 2015年1月31日(土) 15:00-17:30
会場: 静岡県コンベンションアーツセンター
グランシップ 映像ホール
事前申込: 不要(先着99人)
入場: 無料

パネリスト:
静岡県立大学国際関係学研究科附属
グローバル・スタディーズ研究センター
・石川 准(センター長/教授)
・湖中真哉(副センター長/教授)
・高畑 幸(准教授)
・松浦直毅(助教)

主催: 静岡県立大学国際関係学研究科附属グローバル・スタディーズ研究センター
共催: 読売新聞静岡支局

■プログラム

14:30 開場

15:00 主催者挨拶、趣旨説明

15:10 報告 1 松浦直毅「アフリカの自然との共生 — 熱帯雨林に暮らす人びと」

15:30 報告 2 石川 准「障がいと共生社会 — 障害者差別解消法の施行に向けて」

15:50 休憩

16:05 報告 3 湖中真哉「アフリカの紛争と民族共生 — 平和構築の実例から学ぶ」

16:25 報告 4 高畑 幸「静岡県の在住外国人と多文化共生 — 新たな時代をむかえて」

16:45 休憩

17:00 パネルディスカッション

17:30頃 終了予定

■パネリスト報告の要約

アフリカの自然との共生【松浦直毅】



「自然と共生する」こととは、たんに自然を愛でたり 楽しんだりすることではなく、ときにはきびしい自然に立ち向かい、自然とかけひきをするような緊張感をはらんだものです。また、自然をまもることによって、その自然を利用して生きる人びとの生活がおびやかされることもあります。自然との共生はけっして簡単なことではないのです。アフリカの熱帯雨林に暮らす人びとの生活や文化をもとに、人と自然の共生のあり方について考えましょう。

障がいと共生社会【石川 准】



障害者差別解消法とはどのような法律であり、その施行のための作業がどのように進められているのか、施行後この法律は日本社会にどのような変化をもたらす可能性があるのかについて考えを述べます。また障害者権利条約、インクルーシブな社会、障がいの社会モデル、合理的配慮、建設的対話、障害者政策委員会の役割、モニタリングなどについて解説します。

アフリカの紛争と民族共生【湖中真哉】

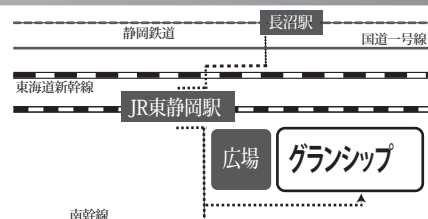


多民族国家が多いアフリカでは現在でも紛争が続いている地域があり、異質な人々の共生という点では最も多くの困難に直面しています。しかし、だからこそ、多文化共生と平和構築のための様々な試みが実践されており、わたしたちはそこから様々な可能性を学ぶことができます。アフリカでは民族はもともと柔軟であり、平和共存は、理念や啓発よりも、人々の自主的な工夫と実践によって日々創り出されてきたことをご紹介します。

静岡県の在住外国人と多文化共生【高畑 幸】



静岡県は全国で8番目に在住外国人数が多く、先進的な多文化共生施策を実施してきたことで知られています。しかし、2008年の世界金融危機以降はブラジル人が減少し、フィリピンや中国、ベトナムといったアジア出身の人びとが相対的に存在感を増してきました。同時に、定住・永住した外国人の高齢化も始まっています。国籍の多様化と永住者の高齢化という新たな局面を迎えた静岡県内の在住外国人の現状から、私たちの身近なところにある「共生」を考えましょう。



静岡県コンベンションアーツセンター
グランシップ 映像ホール

〒422-8005 静岡県静岡市駿河区池田79-4

TEL 054-203-5710 (代表)

アクセス <http://www.granship.or.jp/parking/index.html>

JR東静岡駅南口からメインエントランスまで徒歩約3分

■お問い合わせ先

〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1

静岡県立大学国際関係学研究所附属

グローバル・スタディーズ研究センター

湖中真哉

電子メール: maaculture@gmail.com